日本ベトナム初の合作映画「ベトナムの風に吹かれて」

撮影レポート（１）

・・・

日本とベトナム初めての合作映画「ベトナムの風に吹かれて」の撮影が 11 月 30 日からハノイで始まった。

これについては私のブログ（http://ueda-seminar.cocolog-nifty.com/blog/）で連載中であるし、毎日放送ラジオ番組１１７９「上田義朗のベトナム元気！」（http://www.mbs1179.com/genki/）でも紹介している。

以下は、一般社団法人・日本ベトナム経済交流センターの月刊誌（2014 年 12 月号）からの記事を抜粋・加筆している。本映画製作にご関心の皆さまの参考になれば幸甚である。

・・・

当センター副理事長・上田義朗・流科大教授が語る

ベトナムのビジネス新展開

第 12 回　日本ベトナム初の合作映画「ベトナムの風に吹かれて」
――ハノイ駅で撮影始まる――

日本ベトナム初めての合作映画「ベトナムの風に吹かれて」の撮影が、10 名以上の日本人スタッフと松坂慶子・草村礼子・大森一樹監督の常駐参加によって 11 月 30 日～12 月 20 日の間にベトナムの首都ハノイで実施されている。今後、主人公の出身地の新潟ロケを経て編集作業に入り、来年３月末に試写会。７月には一般公開される。

映画タイトルは「越後のＢａちゃんベトナムに行く」、「ラストライフをベトナムで」、「越後のふたりベトナムを走る」と変遷したが、ようやく上記に決定された。映画の挿入歌「風に吹かれて」（ボブ=ディラン）に由来する。このタイトルはベトナム人の間でも好評である。紆余曲折があっても最後は最適解にたどり着く。この経過と同様に映画撮影から一般公開まで順調に進んでもらいたい。

映画の概要：映画名「ベトナムの風に吹かれて」

○製作「ベトナムの風に吹かれて」製作委員会
○エグゼクティブプロデューサー　上田義朗（日本ベトナム経済交流センター）
○プロデューサー　岡田　裕（アルゴ・ピクチャーズ）
○アシスタントプロデューサー　江尻健司
○ベトナム・プロデューサー　グエン=ホアイ=オアイン（ドンドショー社）
○ベトナム・コーディネーター　グエン=タイン=タム（当センター顧問）
新妻東一（三進ベトナム代表）

○原作　小松みゆき『越後のＢａちゃんベトナムへ行く』（２Ｂ企画）
○脚本　大森一樹　北里宇一朗
○脚本協力　港　健二郎　中空よおい
○監督　大森一樹　ダン=タット=ビン
○出演者　松坂慶子　草村礼子　藤江れいな　貴山侑哉　山口森広　柄本　明
　　松金よね子　吉川晃司　奥田瑛二　チャン=ニュン　チャン=ハーン
　　ビン=スィエン　バン=バウ　ジェム=ロック　ヴ=キェウ=ミー
○協賛　ＹＫＫ、東芝、佐川急便、ヤマハ、東和製作所、さくらホテル、
　　なごみクリニック、三幸学園、亀田製菓、ベトナム航空、テルミクラブ、
　　新潟ベトナム協会、経営情報サービス、トヨタ自動車、サンワインダストリー、
　　内田産業（予定）、・・・
○挿入歌　風に吹かれて（ボブ・ディラン）
○配給　ＪＴＢコミュニケーション、綾プロ、アルゴピクチャーズ
○助成　文化庁平成２６年度国際共同製作映画支援事業採択作品
　　国際交流基金（平成２７年度助成申請中）

本号では、ハノイ駅を舞台にした 11 月 30 日の映画撮影の様子を紹介する。当センターは、ベトナム鉄道との長い友好の歴史がある。1999 年 6 月に、日本ベトナム初の「親善サッカー試合」（関西Ｊリーグ４チーム若手選抜がベトナム遠征）を主催し、スポーツ界での交流に先駆的に貢献した。この合作映画でハノイ駅が舞台になることは、ベトナム鉄道を広く日本に紹介するだけでなく、文化面での交流に当センターが新たな１頁を開いたとみなされる。さらに１月の新潟での撮影場面は、新潟の雪景色と上越新幹線をベトナムの人々に強く印象つけることになるであろう。

プラットフォームでの撮影

ハノイ駅で日本ベトナムの合作映画が撮影される。これまでＴＶ番組では『恋するベトナム』（西田尚美主演、2004 年）のベトナム鉄道が記憶に残っているが、一般公開の映画では初めてではないか。

主演女優・松坂慶子さん

大森一樹監督

松坂さんは余裕の撮影スタート。優しい明瞭なセリフ回しは、まるで子どもに対する母親のように思われた。他方、ハノイの自宅の撮影では、認知症の母との激しい格闘の場面があり、そこでは激高した感情が表現される。この感情を際立たせるためには平常の優しさが必要なのかもしれない。もう２年近く前から出演を決心されていた松坂さんの「役作り」の成果なのだと思う。

大森監督は完全に「勝負服」である。黄色いズボンに赤いＴシャツ。それに「鉢巻き」を締める。監督として日本人のみならずベトナム人を引っ張るリーダーシップの表現であると思われた。大森監督は常々「映画の内容は任せておいて」と言われている。映画監督としての意欲または気迫が前進から発散されていた。

松坂さんと母親役の草村礼子さん

藤江れいなさんがハノイ駅構内を歩く

ベトナム語の練習

新妻東一さんと藤江さん

ハノイ駅では、ハノイからタインホア向かう列車に乗り込むという想定であるが、実際の列車はハイフォン行きである。松坂さんは撮影の間にベトナム語を勉強。三進ベトナム社の新妻さんは、ベトナムのドキュメンタリー番組制作の協力者として有名だが、映画制作の協力は初めてと言われていた。「映画制作は丁寧な作り方をしていて、いろいろ勉強になります」と言われていた。

３人で列車に乗り込む

陸橋からの撮影：大森監督の演技指導

撮影は日曜日。構内は閑散としており、順調に撮影が進む。草村礼子さんは、すっかり原作者・小松さんのお母さんになりきった雰囲気を発散している。お母さんは「新潟弁」を話して「認知症」という設定だから、大変な演技力が求められる。私は、草村さんを宿泊のサクラホテルからハノイ駅までタクシーでご案内したが、精神を集中されている様子が理解できた。

藤江れいな（ＮＭＢ48）さん

藤江さんは、堅実な考えを持った社会的な意識の高い、しかし現代風の若い女性を演じている。本年 10 月の公開された新作映画「いつかの、玄関たちと、」では主役を演じている（http://itsugen.jp/）。ますますの映画女優としての発展を応援したいと思う。

裏ハノイ駅で列車内の撮影

ハノイ駅と言えば、ロッテリアのある日航ハノイホテルに近い駅舎を想起するのだが、その裏側にもハノイ駅があることを今回初めて知った（写真下左）。ここでは列車内での撮影が行われた。列車の窓にスクリーンを貼って、照明を当てながらその前で黒い板をゆっくり回転させる（写真下右）。そうすると日光が電柱に遮られたように列車内からは見えて、列車の移動感を演出できる。

ハノイ駅（裏）

列車内での撮影準備

列車内での撮影の様子は写真下左。カメラの眼がモニターに連動していて、それを見て監督は指示を出す。写真下右は、そのモニターの映像である。写真の右側からの照明による光線の演出は前述の通りである。

列車内の撮影

モニターの映像

録音機材の前には「静かにして下さい」というベトナム語のメモが貼ってある。「本番行きます」、「よーい、スタート」となれば、当然、周囲の雑音や私語が厳禁となる。緊張感が日本人の間にはあるが、ベトナム人は少し距離感があるようだ。しかし、このハノイ駅の場面は撮影の初日である。日本人とベトナム人のスタッフの間での一体感が次第に醸成されるだろう。それに伴って映画の撮影技術の交流も深まる。これでこそ合作映画の存在意義である。

共同映画のベトナム側のタット=ビン監督も撮影にもちろん同行している（写真下左）。撮影初日にベトナム人俳優の出番はないので監督の出番もなかったが、ハノイ駅との折衝やベトナム人スタッフに対して指揮をとっていた。彼の厳しい目線や本年 6 月の記者会見での堂々とした映画紹介の発言は、ベトナムを代表する監督の風格や自信を感じさせる。タット=ビン監督の監督ぶりを早く見てみたい。

タット=ビン監督

ハノイ駅のエキストラの人々

写真上右は、松坂さん・草村さん・藤江さんが列車に乗り込む場面の背景となるエキストラの人々。この中には偶然に撮影を見学されていたキヤノン=ベトナム社の後藤さんら日本人２名が参加している。こういう撮影現場を日本ではなかなか見ることはできなし、エキストラになるなど想像できないが、それがベトナムでは可能になる。だからベトナムは面白い。

今後、松坂さんとベトナム人俳優のベトナム語でのセリフのやり取りがある。また奥田瑛二や吉川晃司が 12 月 5 日から撮影に順次参加する。吉川さんは、ご自身の吉川晃司の役をされる。奥田瑛二さんと会話場面がるが、この２ショットは空前絶後ではないか。

この映画、今後のクランクアップそして一般公開まで適時、その経緯を紹介してみたいと思う。斯うご期待。　（流通科学大学教授）

上 田 義 朗(うえだ　よしあき)
連絡先（携帯電話）:（日本）０８０－６１５１－３４５４
（ベトナム）０９０－４７３－５６２０
Ｅメール：ueda-y@spa.nifty.com